宮中顧問官長崎省吾が語る明治天皇

—昭和二年一月一日実施の談話聴取から—

堀 口 修

はじめに

明治という時代を語る時、明治天皇の存在を抜きにすることはできない。その存在は、圧倒的な迫力で我々日本人に迫っている。ところで、明治天皇の為人はどのようなものであったのか、ということを知ろうとすると意外と難しいことが理解される。確かに天皇崩御後、民間では明治天皇の伝記などが数多く出版されており、その中で関係者がいろいろと語っているのではあるが、当時としては当然のこととして恐れ多いとして、天皇の為人を語っていてもどうしても物足りなさを感じてならない。

そこで本稿では「明治天皇紀」を編修していた宮内省臨時帝室編修局が、編修上の必要性から数多くの側近者に談話聴取した時の史料を用いて、あまり語られていない明治天皇の実像に迫ってみたい。

なお、本稿では、それらの談話聴取史料の中から、特に昭和二年一月一日になされた長崎省吾への談話聴取を手掛かりにして、彼が語る明治天皇の姿を紹介してみたい。勿論のこと長崎の談話は、「明治天皇紀」の編修において引用され、当該記事に厚みを加えているのであるが、その引用の仕方は当該記事の編修との兼ね合いからなされており、彼の談話の意図がすべて生かされている訳ではない。しかし、彼の談話を熟読玩味していると、編修では充分生かされていない部分に非常に興味深いものもある。長崎の談話の中には、歴史の表舞台では語られず、まさに歴史の奥に隠された秘事がある。これらは歴史理解を深める重要な情報源なので、そうした点に意義を見出して、以下、彼の話に耳を傾けてみたい。

一 長崎省吾の経歴

長崎省吾は、嘉永五（一八五二）年、薩摩藩士の子として生まれた。長じて藩校造士館に学び、その後、江戸の昌平黉に学ぶ。維新後、渡米してミシガン大学を卒業する。以後の経歴を表にすると左のようになる。

明治二二年二月	外務三等書記生に任じられ、外交官として在ロンドン日本公使館在勤を命じられる。
一三年二月	帰国後、依願免本官。同時に宮内省御用掛及び兼式部寮御用掛を仰せつけられ宮内官の道を歩みはじめ。
一七年一〇月	式部官に任じられる。
二〇年 四月	宮内大臣秘書官兼任。
二二年 七月	宮内大臣秘書官兼式部官。
三〇年 九月	兼任調度局長。
三二年 九月	調度局長に任じられ、また宮内大臣秘書官兼任となる。
四一年 一月	調度頭に任じられる。
四一年 六月	依願免宮内大臣秘書官。陞叙高等官一等。
四三年二月	兼任別当。閑院宮附を仰せ付けられる。
大正 三年 六月	免式部官・別当。休職仰せ付けられる。
五年 六月	休職満期。宮中顧問官に任じられる。
昭和二二年 二月	逝去。

長崎は、最初アメリカ留学の経験を買われて、外務省、

ついで宮内省の式部関係のポストを歩む。と同時に宮内大臣伊藤博文の秘書官なども務める。明治末年には別当として閑院宮附となる。その後、大正五年から逝去まで宮中顧問官を務める。こうした長崎の経歴からして、彼は明治天皇を語るに十分な資格を有している人物である。

さて、大正三（一九一四）年二月、宮内省に臨時編修局（後、臨時帝室編修局）が設置された。臨時編修局は、明治天皇の伝記である「明治天皇紀」を編修することを目的に設置された機関である。編修局では明治天皇に関係する人物や御側で仕えた人物から談話聴取を行い、伝記編修の参考資料としている。本稿で用いる昭和二年一〇月一日実施の「宮中顧問官長崎省吾第一回談話速記」¹⁾もその中の一つである。長崎への談話聴取は、前後三回行われている²⁾が、どれもポリウムがあり一回ですべてを検討すると雑になるので、既述したように本稿では第一回のものを用いて長崎が明治天皇をどのように語っていたかを検討してみたい。

右に記したように第一回の談話聴取は、昭和二（一九二七）年一〇月一日に行われたのであるが、聞き手として名前を確認できるのは臨時帝室編修局総裁金子堅太郎。第二回も同じく金子であるが、第三回は金子以外に編修官長三上参次、御用掛本多辰次郎、大原重明の名前がみえる。

しかし、各回の談話聴取の席には右の人物以外にも何人かの編修局員がいたものと思われるが、いまそれを確認することはできない。

さて、第一回の談話聴取の時、編修局側はどのようなことを聴取しようとしていたのかというと、それは長崎が式部官であったこともあり、主に外国の皇族や要人との交流にあった。

二 長崎省吾談話聴取——その一——

本節では長崎が式部職関係の仕事に従事したことを理解することも兼て、はじめに観菊会・観桜会、三大節、ついで伊国皇族ジュノア公と新年御拝、ハワイ王との交流、英国皇孫エドワード親王とジョージ親王の来日、前米国大統領グラント將軍の来日と日中問題、米国外交官フート・英国外交官パークス・独国外交官オステンドの活動への評価、皇室の慈善事業と井上馨、明治天皇と新宿御苑における鴨猟・薩摩芋・君臣水魚の交わりなどについて触れてみたい。

○明治一三年——観菊会・観桜会

長崎と皇室儀礼の問題は、彼が英国公使館に勤務していた時からのことであった。長崎によると、英国公使館勤務の時、元老院議員として井上馨が英国を訪れた。この時、

長崎は、英国公使上野景範から皇室並びに社会全般にわたる研究を命じられていた。この時、長崎は研究の成果について井上に進言するところがあった。そうした経緯からであるうか、長崎は観桜会・観菊会・三大節の式次第に關わったようである。長崎によると、観桜会・観菊会は普通の御陪食とは異なつて三人称での御召しとなり、「聖上皇后 両陛下ノ命ヲ奉シ」と書き記され、「全ク英吉利ノ帝室ノ御案内状」によるものという。また園遊会のようなものは古来日本にはなく、欧州では英国が本とされ、非常に重要視されたため、明治一三（一八八〇）年の秋の観菊会の開催の際には右大臣岩倉具視をはじめ参議・宮内卿がでてきて、設営方法から天皇の行為にいたるまで研究されたといふ⁽⁴⁾。そして当初は純粹に英国風であったが、その後日本的な部分も形成されたといふ⁽⁵⁾。

○明治一四年——三大節

明治一四年一月から四方拝・紀元節・天長節の三大節には外国の使臣を召されるようになる。使臣らは非常にありがたく思い参内するようになったといふ。この時、長崎は、ここだけの話と断りながらつぎのようなことを語る。

確カ伊太利ノ公使ト記憶シテ居リマス、日本流儀ノ膳ガ出テ刺身ノ脇ニ醬油ガ附ケテゴザイマシタ、伊太利

公使ハ醬油ガ葡萄酒ノ色ニ似テ居リマスカラ、全ク生葡萄酒ト思ツテ飲ンデシマヒマシタ、傍ニ居ツタ他ノ公使ガ大変ニ心配シテ煩ラヒハセヌカト云フコトデ、御宴ヲ終リマス、私ニ伊太利ノ公使ガ斯ウ云フコトヲシタ、煩ラウカモ知レヌガ何カ葉ハナイモノカト申シマス、私ハ驚キマシテ伊太利公使ニドウカアリマセヌカト聞キマス、ドウモナイト申シマス、ソレデ若シ御気分ガ悪ケレバ侍医寮ガアルカラ御案内申上ゲマスト言フト、本人モ笑ツテ、自分ガ全ク不慣レデ如何ニモ色ガ似テ居ルカラ葡萄酒ト鑑定シタ、実ニ粗忽ナコトヲシタト言ツテ、自分ノ粗忽ヲ省ミテ笑ツテ居リマシタ

食文化の違いからくるトラブルであるが、外国人を招くとうとした点にも注意を払わないといけないという典型例の話である。全く新しい式典導入の難しさであろう。

○明治一四年——伊国皇族ジュノア公と新年御拝

明治一四年一月、新年の御拝に際し、イタリアの皇族ジュノア公が赤坂仮皇居を訪れたのであるが、祝賀の御詞が済んだ後、ジュノア公は、明治天皇の儀式を補助するために天皇の側に侍立するという。この時長崎は、天皇の反応が気がでなかった。その様子について彼は、つぎのよ

うに語る。なお、()内は引用者によるもの。以下同じ。

只今ノ宮殿(明治宮殿)ノ正殿トカ若クハ其他ノ御場所デゴザイマス、比較的ニ物ガ整頓シテ居リマスガ、御承知ノ通り赤坂ノ仮皇居ハ元ノ紀州邸デ壁ハ紙ガ貼ツテゴザイマス、ソレカラ御居間ニハ「ストーブ」ガゴザイマスケレドモ外ハ何ノ御飾モゴザイマセヌ、其処デ外国ノ皇族ト共ニ拝賀ヲ御請ケニナル。陛下ハ何ト思召スカ知ラント思ツテ心窃ニ心配シテイ居リマシタ所ガ、流石ニ明治天皇ハ其御態度ト言ヒ如何ニモ御親ミヲ以テ対セラレテ、何等此処ハ斯ウダカラドウト云フヤウナ御考ハ御浮バセラレナイヤウデアリマシタ、サウシテ左ガ 皇后陛下デ、右ニ伊太利ノ皇族ガ御立チニナツテ居リマシテ、勅任以上ノ拝賀ヲ御請ケニナリマシタ、今迄一月ニ御出デニナツタ外国皇族ハアリマセヌ、此御方ガ日本開闢以来初メテ、ゴザイマス、サウシテ又其後モゴザイマセヌ、ソレカラ午前ノ中ニ拝賀ヲ御請ケニナツテ勅任官ノ拝賀ガ済ミマスルト、ソコデ御暇乞ニナツテ御帰リニナリマシタ⁽⁶⁾

ここで語られている情景は、普通の感覚では理解できないのであるが、この時、天皇の左に皇后、右にジュノア公が立つ中、天皇は勅任官以上の拝賀をうけた。これは、前後にないことであつたという。確かに異例中の異例であつ

た。しかし、明治一四年の新年拝賀ではこうしたことが起きていたのである。まさに近代の皇室儀礼が欧米の皇(王室儀礼とリンクさせていかざるを得ない現実の一端でもあった。その後、明治天皇は、ジユノア公が乗り込みの軍艦での午餐の申し出をおうけになり、その軍艦に行幸になり御会食なされた。御食事後、ジユノア公は、日本語で天皇の健康をお祝い申し上げるとの挨拶をしたのである。こうした状況においても明治天皇は適切に対応されており、その適応能力の高さに驚かされる。

○明治一四年——ハワイ王との交流——東方策・海底電信・カピオカラニー——

明治一四年三月、ハワイ王カラカウアが来日し、浜離宮内の延遠館に宿泊した。表立った会見後、さらに赤坂の仮皇居で会見がある⁽⁸⁾。その時、ハワイ王から極秘に明治天皇に三つの献言がなされた。第一は、東方連合策であった。

只今ノ中ニ東洋諸国ハ一致共同ノ策ヲ採リマセヌト、将来如何ニ成行クヤウニナリマセウカ、マダ今ノ所斯ウシテ見渡シマス、支那ノ一部ヲ除クノ外ハ手ガ着イテ居リマセヌ、仍テ日本天皇陛下ヲシテ垂細垂連合ノ盟主トシテ連合ノ策ヲ御立テ遊バスヤウニト云フコトヲ細々ト御話ガアリマシタ、陛下モ慎重ノ態度ヲ以

テ御聴キ遊バシテ居リマシタ、(中略)二三日経チマスト井上(馨)外務卿ガ来イト云ハレマスカラ何ツテ見マス、東方連合策ト云フコトハ事柄ニ於テ洵ニ御尤ナ次第アルケレドモ、支那ヲ見ルト今李鴻章ガ居ル、又其他ノ人モアツテ容易ニ日本ガ盟主トシテ立ツト云フヤウナコトハドウカト思フ、ノミナラズ暹羅ニセヨ印度ニセヨ距離モアル、言葉モ違ヒ、風俗モ異ナルカラサウ云フコトハ容易ナコトデハナイ、内閣デモ篤ト詮議シテ見タガ、此問題ハ陛下モ篤ト御考慮遊バスコトニナツテ居ルカラ、其心持テ何カ御話デモアツタナラバ申上ゲテ置イテ呉レ、⁽⁹⁾

この明治天皇をアジアの盟主とする東方連合策は、天皇も考慮するものとなったようであるが、外務卿井上馨はその趣旨は理解できても、中国には李鴻章などがおり日本が盟主ということには問題もある、またシヤム(タイ)やインドは距離があり、言葉や風俗が異なるなど容易ではないとの判断が働いた。

第二は、東洋海底電線のこと、ハワイと日本との間に敷設したいとの提案であった。この提案に対して井上は、「国権ノ拡張」になり、かつハワイ王の申し出なので都合がよいので詮議する必要を感じたようであるが、明治一〇年の西南戦争後の財政困難を踏まえると難しいとの判断が

なされた。

其趣旨ヲ銘々共承ツテ、只今デ謂フ海上権トカ云フコトハ其頃ハ存ジマセヌガ、併シ電線ヲ伸ベルコトハ国権ノ拡張ニナルト云フコト丈ケハ考ヘテ居リマシタカラ、布哇王御自身ノ御願デアレバ此事ハ洵ニ都合ガ好イト考ヘマシテ、当時ノ井上外務卿ニモ申シマシタ処、篤ト詮議スルト云フ御話デゴザイマシタ、(中略)ソレカラ海底電信ノコトモ洵ニ国権ノ延長デアルカラ善イ事デアルケレドモ、之ニ付テハ亜米利加人ノ某ガ先年願出デタコトガアル、ソレハ若シ充分ナ成績ガ挙ラヌトキハ、ドウゾ五分ノ利子丈ケヲ日本政府デ補ツテ呉レヌカト云フ話モアツタケレドモ、マダアノ頃ハ十年ノ戦争後財政困難ノ場合デアルカラ利子補給ノコトモ容易デナイノデ旁々断ツタ次第デアル、サウ云フ行掛リデアルカラ今直チニ此処デ海底電信云々ト云フコトモ此等ノ間ヲ考ヘルトムツカシイカラ、其心持ヲ以テ何カ御話ガアツタラ程良く、内閣デ種々詮議致シテ居リマスケレドモ、ドウモムツカシイヤウデゴザイマス⁽¹⁰⁾ト云フコトヲ申上ゲルヤウニト云フコトデゴザイマシ

第三は、当時のハワイ王の姪「カピオカラニー」妃殿下と山階宮定麿王(後の東伏見宮依仁親王)との婚約問題で

あった。この話は最近ではよく知られていることではあるが、近代の皇室制度や皇族のあり方という難しい問題とながらうために、この段階では実現することはなかった。⁽¹¹⁾

其頃山階宮ハ海軍兵学校ニ在ラセラレマシテ、同所ヨリ浜離宮ハオ近イモノデゴザイマスカラ、ヨク釣ヲ遊バストカ何カノ御相手ヲ遊バサレタモノデゴザイマス、オ若イ時分デゴザイマスカラ布哇王ガ毎日接セラル、内ニ可愛イト云フ念ガ増サレマシテ、布哇王ハ其持つテ居ラル、時計ヲオ上ゲニナリトカ、或ハオ歩キニナルトキニ何程歩イタカト云フコトノ分カル時計ミタヤウナ物ガアリマスガ、サウ云フ物ヲ惜気モナク山階宮ニオ上ゲニナリマシタ、サウ云フヤウニ非常ニ可愛ガツテ居ラレマシタカラ、ドウゾ此御方ニ「カピオカラニー」ヲ貰ツテモライタイト云フ御願デゴザイマシタ、是モ井上外務卿ハ篤ト内閣ニ於テ詮議スルト云フコトデゴザイマシタ、(中略)ソレカラ第三ノ「カピオカラニー」ノ問題モ内閣テ一応相談シタ所ガ、是ハ良カラウ、此事ハ運ブデアラウト云フコトヲ申サレマシタ、ケレドモマダ井上外務卿カラ公然ト陛下ニ言上セラレルノカ、或ハオ直キニ申上ゲラレナイノデアルカ少シ判然致シマセヌノデ、井上侯ノ内意トシテ長崎ガ伺ヒマシテ、之ヲ口外スルコトヲ慎ンデ——控ヘテ居リマ

シタ

ソレカラ二三日経チマスト井上侯ガ又外務省ニ来イ
ト云フコトデ出マシタ、所ガ、此間「カビオ(カ)ラ
ニ」ノコトヲ良カラウト言ツタカ、布哇帝ニ申上ゲ
タカドウカト申サレマシタノデ、「慎シテ控ヘテ居
リマシタ」ト御答致シマスト、「アレハ言ツテモ良カ
ラウト云フコトデアツタケレドモ、又深ク考ヘル向キ
モ出テ来テ、外国ノ皇室トノ結婚問題ガ後ノ累ヒニナ
リハシナイカト云フ心配モアルカラ、是ハムツカシイ
ヤウデアル、三問題トモムツカシイト云フコトハイカ
ヌケレドモ、陛下ガ御尋ニナツタラ何トナク其含ミデ
申上ゲテ置イテ呉レ」ト云フコトデアリマシタ、ソレ
デ布哇王ノ御申出ニナリマシタ三大問題ハ、明治天皇
ニ親シク言上セラレタ次第デアリマス、¹²⁾

右にみたように三問題はいずれも実現しなかったが、長
崎は東方連合策についてその後、ロシアが満州に進出して
きたことを踏まえてハワイ王の見識に高い評価を与えてい
る。

明治十四年頃ニ東方策ト云フコトハ、日本人中ニ考
ヘテ居ツタ向ガアツタカ知りマセヌガ、銘々共ハ初耳
デゴザイマシテ、如何ニモ其後ノ東洋ノ有様ヲ見ルト、
明治十四年ニ布哇王ノ言ハレタコトハ成程事実ニ現ハ

レテ来マシテ露西亜ガ満州ニ蔓ツテ来ル有様ヲ見ルト、
ア、云フコトヲ言ハレタガ本当ニ事実ニ成ツタ、実ニ
偉イ名帝デアツタト云フコトヲ考ヘマシタ¹³⁾

そして明治一五年、ハワイ王が明治天皇に提言した東方
連合策その他について、天皇から親書を送ることになり長
崎がそれを携帯してハワイへ赴くことになったが、その内
容からして憚れるところがあったのであろう表向きは米國
出張という辞令がでたという。長崎がハワイ王に親書を捧
呈すると、王は何ら異存なき態度をとられたが、それに代
わって王から東京滞在の時にも触れていた日本人の移民を
促す発言があった。これに関連して王自らが長崎を案内し
て開拓地へ赴くことがあった。¹⁴⁾ さらに翌一六年にはハワイ
王の戴冠式があり、全権大使杉孫七郎の一行に加わり、長
崎も随行することになった。ついで長崎は、明治天皇から
グラント將軍へ御贈品(食器)を渡すようにとの御沙汰に
より米國に赴いた。彼はワシントンで將軍に面会しその使
命を果たしたのであるが、これは明治一二年、將軍が来日
した際、日中間の問題について尽力するところがあり、長
崎によると「明治天皇ハ日本ノ為ヲ思ツテ進言シタ外人ニ
対シテハ、常ニ温キ思召¹⁶⁾」があったことによるものであつ
たという。

○明治一四年——英国皇孫エドワード親王及びジョージ親王の来日

明治一四年一〇月のエドワード親王とジョージ親王（後のジョージ五世）の来日の際、明治天皇へのガーター勲章授与を実現したいとの思いが日本側にあり、長崎は両皇孫御付でビクトリア女皇の信任厚いとされたダルトン博士へ書面を出して交渉したのであるが、この時はいろいろと難問があり実現しなかった¹⁸。そこでそれに代わるものとして女皇の油絵が進呈されたという¹⁹。また、この時、両皇孫から「筍青」の希望があるが、長崎は日本では法律で禁止されているので難しいと回答すると、彼らから「自分ハ籍ヲ海軍ニ置イテ居ルモノデ、イツ海底ニ沈ムカ知レナイ、其後ハ何デ見分ケガ附クカト云フト筍青一ツデアル」との考えが示された。長崎は、この両皇孫の考えに感動したと語っている。その後、このことについて英国の皇太子及び妃殿下の御許しもあるとのこと²⁰で、結果、関係者が動いたという。

○明治一六年——米国人外交官フート／明治一六年——英国外交官パークス／明治一五〜六年——独国外交官オステンドの活動への評価

日本のために尽力する外交官への明治天皇の配慮という

ことについて、長崎は三人の人名をあげて興味深い話を語る。①米国の朝鮮国駐劄特命全権公使ルシアス・ハーウッド・フート、②英国公使ハリー・スミス・パークス、③独国公使館オステンドである。

①実は長崎が米国に赴いた時、朝鮮国へ赴任するフート公使と出会う。これは、日本の対朝鮮国政策に深く関わっている。赴任途中の明治一六年四月、フート公使は、浜離宮で明治天皇に拝謁し、ついで御陪食があった。この席には内閣顧問黒田清隆、外務卿井上馨も同席している²¹。

②パークス公使は、維新时期において活躍した人物として有名である。明治一六年八月、パークスが公使として中国へ転任する際、明治天皇もそのことを踏まえて彼を赤坂離宮に召し午餐を賜うのであるが、当時は転任の際に午餐を賜うことはなかった。天皇とパークスは、種々會話を重ねるのであるが、他方、午餐には内閣諸卿が陪食していたので、彼は司法卿大木喬任に庭の大木を前にして条約改正のための法律改正の必要性、大蔵卿松方正義には財政問題、その他の卿にはそれぞれ担当の國務について「注意ナリ色々ナ考」を述べたのであるが、長崎は彼の見解について「一ツノ公使ガ各國務上ニ就テソレ々々意見ヲ有シテ居」ることに殆ど感服したという²²。

③当時、オステンドは、帝室の獵場について種々取り調べた結果を書類として差し出していたようで、明治一五六年頃のこととして、長崎は、天皇が赤坂仮皇居に彼を召して慰勞の言葉を賜ったということの意図について、つぎのように語っている。

徳大寺（実則）侍従長トカ米田（虎雄）侍従トカ堀河（康隆）侍従トカ云フ人ハ居リマシタガ、一向外国通ト云フヤウナ人ハ居リマセヌ、「オステンド」ヲサウ云フ所ニ特ニ召サレタノハドウ云フ動機カラカト思ツテ調べテ見マス、全ク時ノ外務卿井上侯、ソレカラ上野（景範）（外務）大輔ガ同人ハ陰デ色々尽シマシタカラ陰ノ者ヲ特ニ召サレタナラバ非常ニ有難ガル、有難ガルノハ即チ陛下ノ御徳ヲ昂メルモノデアルト云フ次第カラデアリマシタ、井上侯ハ非常ニサウ云フコトニハ注意セラレテ居リマシタ、⁽²³⁾

日本の国際的地位の向上のためには特に条約改正と法典編纂が重要であつたが、そうした中、明治天皇が各国の外交官に対してきめ細かい配慮を払い、また井上のようにそうしたことに對して天皇自身も積極的姿勢を持ってもらうように働きかけていることが理解される。

○皇室の慈善事業と井上馨

長崎は、皇室の慈善事業については井上馨が「帝室ト慈善事業トヲ結付ケルト云フコトモ井上侯ハ意ヲ用キテ居ラレマタ、殆ド世間デハ誰モ話シマセヌガ愛宕下ノ慈惠院ヲ慈善病院ニスルト云フコトハ昭憲皇太后ノ思召モ無論アツタノデゴザイマスケレドモ、サウ云フモノヲ拵ヘルヤウニセラレタノハ矢張井上侯デアリマシタ、井上サンハ其当時色々考ヘラレテ帝室ト慈善事業トヲ結付ケルコトニ付テ尽力セラレマシタ」と、井上の尽力を高く評価している。

ついで、皇后と慈惠会との關係に言及し、皇后が総会に出席になり、さらに芝離宮に立ち寄り慈惠会の会員であれば身分を問わず、身柄の如何に拘わらず離宮に召されたことを紹介している。⁽²⁵⁾ さらに長崎は、社会政策という言葉を用いてつぎのように語る。

今日ハ所謂社会政策ト云フノ色々考ヘル人モゴザイマスガ、マダ明治二十年前後ニハサウ云フ考モ一向世間ニナイ時デアリマス、ソレニモ拘ラズ慈惠会ノ会員ノ肩書ガアリサヘスレバ芝離宮ニ召サレテ調ヲ賜ハルノミナラズ、陛下ト同ジ珈琲ヤ「ビスケット」ヲ戴クト云フコトハ実ニ有難イオ仕向ケデアリマシテ、會員一同洵ニ感激シテ居リマシタ、尚ホ慈惠会ノ基本金ヲ拵ヘル為ニ鹿鳴館ニ「バザー」ヲ開イテ、各大臣其他主モナル夫人達ガ受持ヲ極メテ店ヲ張ツテ、品ハ多

クハ手製デ、自身或ハ親族朋友ガ作ツテ、其金ヲ全部寄附スルコトニナリマシタガ、其事ヲ聞召サレテ、皇后陛下ハ長年ノ間鹿鳴館ニ「バザー」ガ開カレマスト必ズ御出デニナリマシタ、奨励ノ為メト一ツハ慈善事業ノ為ニ御買上ト云フ名義ニシテ金を沢山賜ハリマシタ、其金ガ毎年々々慈善会ニ参ツテ基本金トナツテ、昭憲皇太后崩御ノ頃ハ彼是三十万円近イ基本金トナリマシタ、是ナドハ昭憲皇太后ノ厚キ思召ト、陰ニナツテ尽サレタ井上侯ノオ力ノ結果ト存ジテ居ル次第デゴザイマス

○明治天皇と新宿御苑における鴨猟・薩摩芋・君臣水魚の交わり

赤坂に仮皇居が置かれていた時代、新宿御苑内で鴨猟が行われていたのであるが、明治天皇は朝から夕刻まで従者ととも駆けめぐったという。そして猟を終え休憩となると、焼いた薩摩芋が差し上げられるのであるが、天皇から「銘々共ニモ薩摩芋ハドウカト仰⁽²⁶⁾」せになったという。また、猟を終え還御になると、御居間で一寸防寒のために葡萄酒を召し上がるのであるが、銘々にも葡萄酒や日本酒が賜られる。長崎は酒を嗜まないので葡萄酒に砂糖が入れているものが賜られた。そして、天皇は「御笑ヒナガラ色々

ノ御話ヲ遊バスノデ非常ニ有難イ感じガ起リマス、君臣水魚ノ交リト申スコトハ斯ル有様ヲ謂フノデアルマイカト思フ程実ニ温イ心持ニ満チタノデアリマス」と、水魚の交わりを実感する瞬間だと感動的に語っている。

三 長崎省吾談話聴取——その二——

ここでは、明治二年——明治天皇の肖像とキヨソネ、オットマール・フォン・モールと宮中儀礼、皇太子嘉仁親王儲君御治定の内宴、陸海軍連合大演習、ロシア皇太子来日と大津事件などについて触れてみたい。

○明治二年——明治天皇の肖像とキヨソネ

明治天皇の肖像はいくつか存在するが、明治二年に作製されたエドアルト・キヨソネ⁽²⁹⁾のものが最も著名なものである。このキヨソネ作製のものについて長崎は、まずその契機をつぎのように語っている。

明治二十一年ト思ヒマスガ、三島（通庸）警視総監ノ時代ニ芝公園ニ弥生舎ト云フノヲ建テマシテ 陛下ノ行幸ヲ仰ギマシタ所、陛下モ御出デニナリマシタ、金子子爵ハ土方（久元）伯カラ御聞及ビニナツテ居ルカ知レマセヌガ、ソレ迄ハ 陛下ノ御写真ハ仏蘭西式ノ「エボレット」ノアル御写真ノアルノミデ、外ニ御写

真ハゴザイマセヌ、伊藤（博文）公ノ時代ニ願ヒマシテモ「ウン」ト仰シヤイマシタ切りデ御許シガゴザイマセヌ、土方伯モ只今ノ御写真デハ服制ノ上カラ言ツテモ「エボレット」ガアリマシタシ、ソレカラ 陛下ノ御威望ニ御似合アラセラレンノデ御願ヒニナリマシタガ「ウン」ト仰シヤルノミデ御許シニナリマセヌ、ソレデ弥生舎ニ成ラセラレタ折ニ當時印刷局ニ備ハレテ居リマシタ伊太利ノ技師デ「キヨソネ」ト云フ美術ノ鍛錬ナ人ガゴザイマシタ、其人ニ何処カラカ 陛下ノ御様子ヲ見テ「スケッチ」ヲシテ貰フ訳ニ往クマイカ、我君主ノ御写真ガ外国ノ皇室其他内外ニ出サレルニ付テ、陛下ノ御様子ヲ能ク写サレタモノヲ御出シスルコトニシタイト云フ趣意カラ来テ居リマス、⁽³⁰⁾

この発言によると、明治天皇の写真是フランス式の「エボレット」仕様のものがあつたが、それがいろいろな点からして満足いくものではないので新たなものを作製することを願ひ出たが御許しがでない。そこで印刷局に雇われていたキヨソネに「何処カラカ 陛下ノ御様子ヲ見テ『スケッチ』」させることになった。これは、外国の皇室その他内外に天皇の写真を出す際、「陛下ノ御様子ヲ能ク写サレタ」ものを出したいという趣意からであつたという。つぎに長崎は、キヨソネの写生が実際実現するまでの間

の事情を語るのであるが、ポイントは故右大臣岩倉具視の弟で侍従の堀河康隆を説得することであつた。理由は、堀河が侍従の中でも守旧の考えを持つていたからである。そして、長崎が堀河に説明するのであるが、意外にも堀河は「徹頭徹尾賛成」で、理由は現在の写真が「一向御顔ニオ似合」でない、且つ服制も変わっておるし外国の皇族からの申し出にも対応できるようにしたいということであつた。

ケレドモ、陛下ノ御許シヲ経ズシテ「スケッチ」ナドシテハ如何ナモノカ、長崎其精神ニ於テハ、土方サンニ同意デアリマスガ、事柄モ洵ニ結構デゴザイマスケレドモ、御許シヲ得ズシテ專擅ニヤル仕事デゴザイマスカラ余程考ヘナケレバナリマスマイ、ソレデ今侍従ノ中デ故岩倉右大臣ノ弟堀河ハ侍従ノ中デモ守旧ノ考ヲ持つテ居ル人デアルガ、此人ハドウ云フ考ヲ持つツカ内相談ヲシテハドウカ、廉立タナイヤウニ長崎カラ話シテ見タラ良カラウ、趣意ハ我が戴イテ居ル君主ノ御写真ノ其御威望ニ副フヤウナモノガ欲シイノデアル、此赤誠ヲ能ク話シテ呉レト云フコトデゴザイマシタ、ソレカラ堀河ニ話シテ見マシタ所ガ、堀河モ我が君主ヲ思フノ至誠ハ同じ事デ、徹頭徹尾賛成デアリマシテ、今ノ御写真ハ一向御顔ニオ似合ヒデナイ、且ツ服制モ

変ツテ居ル、外国ノ皇族ガ御願ヒニナツタトキ上ゲラ
レルヤウナ御写真ニシタイト言ツテ全然賛成デゴザイ
マシタ⁽³¹⁾

堀河侍従の意外な反応から長崎は話を継いで、キヨソネ
にどこか差し支えないようにして天皇を「スケッチ」させ
るとの考えを語ると、堀河はこれにも賛成であった。そこ
で、長崎は、侍従長徳大寺実則に相談すると賛成で、また
他の侍従たちも賛成であった。そして、宮内大臣土方久元
と長崎がキヨソネに事情を伝えると、彼は「外ナラヌ御用
ヲ仰付ケラレタノハ、全ク自分ヲ御信任ノ結果」であると
「非常ニ感激」するのであった。⁽³²⁾ こうして明治二二年一月、
キヨソネが明治天皇を「精神ヲ籠メテ」⁽³³⁾ 拝写したのである
が、その模様を長崎は、「陛下ノ御姿ヲ遙カ向ウニ襖ヲ立
テ、見上ゲタノデアリマス、御笑ヒニナルノカラ御姿勢カ
ラ能ク分ルノデアリマス、サウシテ、ソレガ出来上ツテカ
ラ写真ニ撮ツタノデアリマス、其御写真ハアナタ方ニ御下
賜ニナツテ居ル御写真デゴザイマス」と、語る。こうして
我々がよく目にする明治天皇の肖像写真とされるものが出
来上がったのである。すなわちそれは写真そのものではな
く、キヨソネが拝写したものを写真に写したものであった
ことが理解される。

それからもう一つのものでき上がった。これは、明治

天皇が剣を杖にして立ったもので、長崎はそれを「非常ニ
御勇壯」⁽³⁵⁾なもの、また、土方と長崎は「非常ニ立派デ、実
ニ御顔ト言ヒ御姿勢ト言ヒ御立派デアル」と評価している。
さて、土方宮相は、出来上ったものを天皇の御覧に入れ
たのであるが、別に御叱りもなく、またよくできたとの仰
せもなかったので心配してしまった。丁度その時、外国の
皇族から天皇の写真をいただきたいとの申し出があったの
で、徳大寺侍従長が写真を二三枚御前に持って出で御記名
を御願いしたところ、御記名なされたので土方が大いに安
心したという。⁽³⁶⁾ こうした経緯に触れた後、長崎は「土方サ
ンモーツ間違へべ進退ニ関スル大問題デアリマシテ、当時
ノ側近奉仕者一同ノ君主ヲ思フノ赤誠ハ至レリ尺セリデア
リマシタ」⁽³⁷⁾と語り、この話を終えている。

○明治二〇年——モールと宮中儀礼

オットモール・フォン・モールは、⁽³⁸⁾ 明治二〇年四月から
同二二年三月の二年間、宮内省に招聘されて新しい時代に
相応しい日本の宮廷のあり方、新年朝拜式・勲章拝用方・
饗宴の配膳方法などについてアドバイスするという仕事に
従事した人物である。長崎は式部官であったので、その
モールの仕事についてつぎのように語っている。

明治二〇年頃ニ独逸ノ帝室及外務省ノ官吏デ「ヘル、

フォン、モール」ト云フ人が我宮内省ニ傭聘セラレマシタ、サウシテ儀式典例ヲ取調ベルコトニナリマシテ長崎ハ伊藤(博文)宮内大臣ノ命ニ依リ一緒ニ取調ベルヤウニト云フコトデ取調ヲ致シマシタ、新年朝拜式、勲章佩用方、饗宴ノ配膳方法、皇族ノ謁見式、晚餐及午餐ノ御接待振等ニ付詳細ニ取調べ御模様ヲ替へ或ハ改正シテ今日ニ至レリ、其結果、新年ノ御儀式モ三日ノ所ガ一日半ニ短縮セラレ、コトニナリマシタ、「二十日正月」ト云フコトガゴザイマシタ、各寺院ノ管長等ノ拜謁デゴザイマシタ、是モ一日半ノ中ニ入りマシテ、済ムヤウニナリマシタ、

また、長崎は、この頃からはじまった女官が各国の大使・公使などから「女官ノ受ケ日」に宮中で挨拶をうけるということについて言及する。長崎は、難しい問題につながる面がある女官のあり方について、明治天皇が「御維新ノ際仰出サレタ御誓文ノ趣旨ト云フモノヲ始終御心ニ在ラセラレ、社交上ノコトニ付テモ其他ノコトニ付テモ必要ト御認メニナリマシタコトハスラスラト皆ナ行ハセラレマシタ⁽⁴⁰⁾」と語る。こうした天皇の積極性にもよるのであろう「女官ノ受ケ日」が実現し、芝離宮で行われた「最終ノ受ケ日丈ケハ盛」んに行われたという。また長崎は、後年東伏見宮依仁親王とドイツに赴いた際、モールに導きられて

ドイツの女官長の「受ケ日」の模様を経験した時のことについてふれ、女官長の目にとまるメリットから各国の大使及び大使夫人たちが来て「何レモ非常ニ注意ヲ払ツテ女官長ニ話ヲシテ居リマス、ソレカラ宮中ノ舞踏会其他夜会等ニ臨ンデモ女官長ノ眼ニ留マルヤウニシタ方ガ、大麥都合ガ好イト云フ所カラ、女官長ニハ皆ナ親ミヲ請フテ出テ来ルト云フヤウナ関係⁽⁴¹⁾」であつたと語る。欧州の王室・皇室とは異なるので単純比較はできないが、これからは日本の女官制度についても研究を深める必要があるのではないか。モールは、長崎と共に新しい時代に相応しい日本の宮廷のあり方や重要な宮中儀礼の改正に尽力しているのであるが、近代の宮中儀礼がどのような経緯の下に確立していったのかという点を考える際、モールの影響は充分検討するに値するものであろうことは想像に難くないが、現在、この問題を検討する上での研究環境は充分整えられてはいない。今後の大きな課題といえよう。

○明治二〇年——皇太子嘉仁親王儲君御治定の内宴

明治二〇年八月、⁽⁴²⁾嘉仁親王の儲君御治定にあたり宮中の大奥で内宴が開かれた。長崎は、この時の女官が「非常ニ交際ニ慣レテ居リマシテ、且又話シニ堪能デ、列席ノ各自ニ適当ナ言葉ヲ以テ挨拶⁽⁴³⁾」をなしていたという。これなど

も女官が外の人士との交流に長けていたことの証左であるう。ついで長崎は、天皇や皇太后・皇后の立ち振る舞いに言及しているのであるが、内宴というごくごく内輪の場所ではあるが、とても想像つかないことを紹介している。

一応才腕ノ汁ヲ頂戴シタ後ニ順次 陛下ヨリ召サレマス、御前ニ進ミマス、陛下ハ盃ヲ取ツテ召上ガラルソレカラ天盃ヲ賜ハリマス、陛下ノ御側ニハ女官ガ居リマシテ、サウシテ臣下ノ盃ニ酒ヲ酌ミマス、各自有難ク頂戴ノ後自席ニ退キマス、其当時マダ青山ニ皇太后ガ在ラセラレマシテ、皇太后、皇后カラ召サレマシテ御前ニ進ミマス、御自身ニ酒ヲ召上ガリ、サウシテ其盃ヲ各自ニ賜ハツテ畏多クモ皇太后宮モ皇后宮モ酌ヲシテ賜ハリマス、是ナドト云フモノハ実ニ恐入ツタ次第デゴザイマス、親シク皇太后様モ御詞ヲ賜ハリ、皇后様モ御詞ヲ賜ハリ、御自身ニ酌ヲシテ下サイマス、儲君ハドウ云フ模様カト慎シデ拜見シマスト是ハ召上リマセヌ、御自身デ「御錫」ヲ持ツテ御立チニナリマシテ、各自ノ前ニ御廻リニナツテ親敷御錫ヲ以テ一ツツ皆へ酌ヲ賜ヒマシタ、此御内宴程和氣藹々タル情趣ノアルコトハ他ニ一向拜シタコトハゴザイマセヌ、実ニ御内宴ト云フモノハ有難イモノデゴザイマス、殊ニ 陛下ガ御自身デ英語デ酒ヲ飲ムコトヲ何ト言フカ

ト云フ御沙汰ガゴザイマシテ、慎ンデ Drink ト申シマスト申上ゲマス、陛下ハ「マー盃 Drink」ト仰セラレマシタ、斯ウ云フ御模様デゴザイマス、其有難サハ実ニ恐懼シ感泣シテ

陛下ノ御優サイイコトニ今更ナガラ一層感激シ欽仰シ奉ル所デゴザイマス⁽⁴⁴⁾

筆者などにはとても想像できない情景であるが、日頃の側近者の奉仕の労苦に対する天皇をはじめ皇太后、皇后、皇太子の心温まる御配慮がひしひしと伝わる話である。また、御内宴では謡曲など、臣下の一芸も披露されたという。長崎は、「御内宴ノ有様ハ実ニ有難イモノデゴザイマシタ」と話を結んでいる。

○明治二三年——陸海軍連合大演習

長崎は、明治二三年三月から四月における名古屋付近での陸海軍連合の大演習の時の明治天皇の統監について、激しい大雨の中、天皇が全身雨に濡れながらも統監を行った⁽⁴⁵⁾ため、長靴が脱げなかったことなどを語った後、「明治天皇紀」の編修官長であった三上参次に対して「折節宮中デ御講演ガゴザイマスカラ、明治天皇ノ御事デモ御話シ遊バストキハ——御晩年ハ別デゴザイマスケレドモ——初メノ内ハ御演習ノ折ハ斯様デゴザイマシタト云フコトヲ御話ニナ

レバ、余程又 御心得ノ一端ニナラセラル、コト、存ジマス」と、昭和天皇への帝王教育の素材として用いる価値があることを示唆したのである。これは、「明治天皇紀」の編修が天皇の生涯を後世に伝えることだけでなく、大正天皇や昭和天皇への帝王教育の一端を担っていたことを明らかにするものである。⁽⁴⁷⁾

○明治二四年・ロシア皇太子来日と大津事件

明治二四年五月一日、来日中の露国皇太子ニコライが琵琶湖遊覧の帰途、滋賀県大津市を通過中、巡查津田三蔵に襲われ負傷するという事件が起きた。所謂、大津事件である。この事件は、計り知れない影響を日本国内外にもたらし、当然のこととして明治天皇も大きな衝撃をうけたことがわかって⁽⁴⁸⁾いる。

この大津事件について、長崎はかなりの時間を割いて話しているの、彼の発言に注目してみたい。まず、長崎は「明治二十四年頃ノ露西亞帝国ト云フモノハ今日ノ露西亞ノ比」ではない、「全世界ヲ脅威シテ居ツタ大國」で、同国の皇太子が来日するというので「皇室モ政府モ非常ニ注意⁽⁵⁰⁾」を払ったと語りはじめ⁽⁵¹⁾る。ついで、露国公使シーウツチが長崎に対して露国と薩摩は古い歴史があるので、長崎から薩摩に往き鹿兒島をみたいという希望を出したことを

語る。

そこで長崎がこの申し出をうけて宮内大臣土方久元に告げると、土方宮相は公爵島津忠義が旧藩主なので都合がよいと判断し、宮相から宮内次官吉井友実⁽⁵²⁾に話を通した。ところが島津公は、外国人という⁽⁵³⁾と英国公使パークスなどごくわずかな人物としか接したことがないため、旧臣たちが容易ならぬ心配ぶりであった。そこで、吉井次官のところ⁽⁵⁴⁾に黒田清隆、西郷従道、大山巖、松方正義、川村純義が集まり忠義公への進言について協議した結果、年長でもある吉井から申し上げることになった。

しかし翌朝、吉井から呼び出しがあり出向くと、吉井は昨晩篤と考⁽⁵⁵⁾えてみたが、今はそれほど忠義公のところへ出入りしていない、自分が対応すると表立つのみならず、もし断られると二の手が打てない、長崎は欧州から帰国後、忠義公のところへ出入りしているのでもしやす⁽⁵⁶⁾い等の理由から長崎に話を通してくれと依頼するのであった。長崎は一度断るが、ついに断り切れず引き受けざるを得なかつた。

そこで長崎が島津家の家令などに相談したところ賛意を得た。彼らは「御維新ノ際ハ国事ニ御勤メニナツタガ、其後ハ麁香間祇候デ居ラツシヤルダケデア⁽⁵⁷⁾ル、是ガ最終ノ國家ノ御奉公ト思フカラ、ドウカサウ云フ具合ニ願ヒタイ」

と述べ、本件については長崎自身が直接面会して言つてほしいとのことであつた。このため長崎は、忠義公に面会しお話を申し上げたところ、丁髷姿の公は「皇室ト国家ノ為ナラバヤラウト⁽⁵³⁾」と述べ、併し自分は不慣れだから長崎が鹿児島に赴き万事やるようにとの発言があつた。

翌日、忠義公は土方宮相と会い、前日長崎と打ち合わせの内容を伝えて承諾の旨を伝えた。よつて土方宮相は、長崎を伴い参内して明治天皇に申し上げたところ、非常に「満足」で、長崎には鹿児島へ赴くようにとの御沙汰があつた。その後、長崎は鹿児島へ赴き準備にあたる。ここに露国皇太子の鹿児島訪問が実現し、忠義公自身による犬追物、鹿児島伝来の土舞など、旧薩摩藩の当主と家臣が内揃つてとても味わいのある饗応がなされたことは有名である。⁽⁵⁴⁾これは忠義公が渾身の力を振り絞つたことによると言つても過言ではない。公には「最終ノ国家ノ御奉公」となつたに違いない。

その後、露国皇太子一行は関西方面に入り、既述したように事件に遭遇したのである。この事件がどれだけ皇室に衝撃を与えたかは、明治天皇が直ちに京都に赴くことになり、皇太子への並々ならぬ御配慮を示されたことでも理解される。そして、五月一三日、天皇は皇太子を寄宿している常盤ホテルに御訪問になる。その時の様子について、長

崎はつぎのように語る。

向フ側カラ申シマス、兎モ角モ政府ノ徽章ヲ着ケタ
巡査ガア、云フコトヲヤツタモノデゴザイマスカラ、
軍隊ノ護衛ガアツテモ、唯頼リニセラル、ノハ 陛下
デアリマシテ、陛下タツト言ツテ信頼セラル、皇太子
ノ有様デアリマシタ、ソレカラ皇太子ハ軍艦ニ御帰り
ニナリマシタ⁽⁵⁵⁾

そして、つぎに大きな問題となつたのが、五月一九日の明治天皇による皇太子が乗艦するアゾヴァ号へ御訪問であつた。これは、皇太子の明治天皇の御懇情への御礼の意味も込めた御招待であつたが、誤解も含む噂のレベルでは、もし天皇が露艦を御訪問になられた時、そのまま露国へ連れて行かれるのではないかとの疑念もあつたくらいである。⁽⁵⁶⁾だが皇太子から御招待の申し出があつた時、天皇はそれを受け入れられた。その時のことを長崎は、つぎのように語る。

陛下ノ思召ヲ伺フコトニナリマシタ、侍従長ヲ経テ陛
下ニ露国皇太子ヨリ御案内ガ参リマシタ、如何遊バシ
マスカト云フコトヲ伺ヒマシタ、土方伯ト長崎ハ侍従
長ノ部屋ニ往ツテ待ツテ居リマシタ、
陛下ニ於カセラレテハ何等ノ御心配モナク立チ所ニ
「往カウ」ト仰シヤイマシタ、侍従長ガ下ツテ来テ

陛下ハ「往カウ」ト仰シヤツタ、此時ハ長崎ナドハ非常ニ感ジマシテ、先考孝明天皇御在宇中ハ国歩艱難ニシテ日夜深く御軫念アラセラレ皇祖ニ対シ此ノ国家ヲ如何ニセンヤトマデ御憂慮遊バサレタル程ナレバ明治天皇ハ御幼少ノ折ヨリ親シク當時ノ大勢ヲ御見聞遊バサレ聖明ノ御英資ニ猶此ノ御教養加ヘサセラレ今ヤ又御自身ニ国ヲ背負ツテ起ツト云フ思召ヲ以テ何ノ御躊躇モナク「往カウ」ト勅諭遊バサレタノデアアルマイカト拝察シ奉リマシテ、宮内大臣、侍従長、長崎ハ皆ナ均シク涙ニ咽ビ恐懼シ感激シタノデアリマス、⁽⁵⁷⁾、

(傍点——引用者)

そうした中、明治天皇はアゾヴァ号を御訪問になり午餐を御会食されたのである。この時の様子について、長崎はつぎのように語る。

其ノ日ガ参リマシテ、陛下ハ露西亞ノ軍艦ニ御出デニナリマシタ、露西亞ノ軍艦ニハ非常ナ設備ガゴザイマシテ、皇太子モ甲板ニ御出迎ニナリ、御休憩所ニ皇太子御自身ガ御案内ニナリマシタ、此ノ時ハ政府ノ役人ハ一人モ御案内ガゴザイマセン、皆ナ宮内官丈ケデアリマシタ、ソレデ軍艦ニ御出デニナツテカラ漸ク皇太子モ御諒解ニナツテ居リマシテ、何レノ国デモ氣狂ヒト云フモノハナイコトハアリマセヌト云フヤウナコト

デ、オ怪我モ極ク微小デアルト言ツテ最早、陛下ニハ御心配ニナラヌヤウニト云フヤウナコトヲ類ニ申サレマシタ、ソレカラ御食事ガ始マリマス、ソレデ皆ナ席ニ著キマシタガ、御食事中モ、陛下ト皇太子トノ談話ハ成ル丈ケ御続ケ遊バシテ途切レナイヤウニト云フ考カラ、始終長崎ハ陛下ノ御背後ニ居リマシタ、又露西亞ノ皇太子ハ実ニ御心優イウゴザイマシテ、チャント「テーブル」ニ長崎ノ席ガ設ケテアルカラ著イテ呉レト仰シヤイマシタガ、御思召ヲ深く拝謝シマシテ、大事ナ場合デゴザイマスカラ陛下ト皇太子ノ御都合ノ好イヤウニト思ヒマシテ後口ニ立ツテ居リマシタ、暫ク経チマスト、又皇太子ガ才腹ガ空イタラウ、話ハドウニカ出来ルカラ席ニ著イテ呉レト云フ仰セデゴザイマシタ、ケレドモオ礼ヲ申上ゲテ自身ノ食事トカ腹ガ空イタトカ云フコトハ毫モ頭ニハナイノデゴザイマス、只偏ニ陛下ト皇太子ノ御間柄ガ愈々親密ヲ御加ヘニナリ、快ヨク御別レニナルコトヲ何ヨリノ事ト、ソレ計リヲ衷心ヨリ祈ツテ居リマシタ⁽⁵⁸⁾

右の発言から露国皇太子が暴漢に襲われたことについて、明治天皇が心配することのないようにかなり配慮していること、また皇太子が長崎へも氣遣いをみせているが、長崎は自身のことよりも皇太子と天皇の会話が親密なものとな

ること、何よりも快くお別れになるようにと衷心より祈る姿勢をとったことが理解される。

ついで、ロシアの習慣として婦人がいない御食事に移り、肉物が終わり菓子をいただくことになり、煙草を喫するため皇太子が煙草入れを持ち出して、陛下に煙草を御薦めになった。この時、天皇は意外な配慮を示した。普段、天皇自身が煙草入れを持つことはないのであるが、天皇は煙草入れの蓋を長崎に開けさせ、皇太子へ差し上げ、さらに列席の人士へもという驚くべき行為にでたのである。⁵⁹長崎は、この天皇の姿をみて「斯ク迄ニ陛下ガ両帝室ノ御間柄ニ御心ヲ尽クサレル其実況ヲ拝スル者ハ実ニ感涙ニ咽ブノ外ハナカツタノデアリマス」と、感動的に語っている。

そしてすべての予定を終えて、天皇は露国皇太子と別れて神戸の御用邸に向かわれた。そこに待ち受けていたのが土方宮相と徳大寺侍従長であった。ふたりとも天皇が煙草入れを持参されたことを知っており、長崎が天皇に何か申し上げた結果かと質問するのであった。しかし長崎がそうしたことはない旨を述べたところ、両人は「深く感動」したのである。

おわりに

以上、長崎省吾が語る明治天皇の姿をみてきたのである

が、最後に語り部としての明治人長崎の特質を述べてみたい。

長崎の語りは、明治天皇を尊敬しているからと言って決してオーバーなものではなく、実に冷静に天皇の言動を語っている。ここに筆者は明治人の中にみられる確かなる人物眼、時代観をみるのである。本稿で明らかにしたように、長崎は明治天皇の功績を語りながらも、併せて自らの役割をもしっかりと語っている。決して天皇を高く評価することだけに終始していない。そこから長崎が自分も明治という時代をつくってきた一人であるとの意識を強く感じるのである。

現在、明治天皇の研究は、急速に進んでいることを実感している。それらの研究から多角的に天皇を理解することが可能となってきた。しかし、天皇を理解する史料はまだ存在している。これらの史料を虚心坦懐に読み込むと、さまざまな明治天皇や明治という時代の実相を学ぶことができる。

本稿は、明治天皇とともに明治という時代を生きた人々の語りを学ぶことにより、作為的でない天皇像や時代像を学ぶことが可能ではないかとの思いからの一つの試みである。その試みから明治天皇が如何に新しい時代の天皇として自ら率先して国家や皇室のあり方を模索していたか、ま

た天皇が側近者たちへ人間味溢れる配慮をなされた方であつたかが理解されるのではないか。

ここに伝統を踏まえつつ革新的なことに挑戦している明治という時代を、明治天皇が多くの人々とともに歩んでいったことを実感してならない。

注

- (1) 宮内庁書陵部図書課宮内公文書館所蔵。なお、本談話速記は、筆者が監修・編集した『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集』第二巻（ゆまに書房、平成二〇〇三年）に収められている。
- (2) 第二回は昭和二年一〇月一九日、第三回は昭和二年二月七日に実施されている。
- (3) 前掲『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集』第二巻、一五頁～一六頁。
- (4) 同右、一六頁～一七頁。
- (5) 同右、一八頁～一九頁。
- (6) 同右、二二頁～二三頁。
- (7) 一八八一年、カラカウア王は、移民や外交上の問題を再検討するため、米国を経て日本・中国・シヤム・インド・エジプトをはじめ、イギリスなどの欧州諸国を歴訪した。日本では初の外国元首の来日であった。
- (8) カラカウア王の来日については、外務省編纂『日本外交文書』第一四卷（一九五一年）所収の「布哇国皇帝来航ノ件」を参照。また、このことについては宮内庁『明治

天皇紀』巻五（吉川弘文館、一九七一年）、二九〇頁～二九九頁にかけて関連の記事がある。なお、従者によるものとして、ウイリアム・N・アームストロング著／荒俣宏・樋口あやこ共訳『カラカウア王のニッポン仰天旅行記』（小学館、一九九五年）がある。

- (9) 前掲『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集』第二巻、二三頁～二四頁。
- (10) 同右、二四頁～二五頁。
- (11) 後年のことではあるが、梨本宮方子女王が李王世子である李垠と結婚したのであるが、この時も皇族が日本人以外と婚姻することの問題点が認識され、各方面での検討・調整が重ねられた事実がある。
- (12) 前掲『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集』第二巻、二五頁～二八頁。
- (13) 同右、二九頁～三〇頁。
- (14) 同右、四二頁～四四頁。
- (15) 同右、四八頁～四九頁。
- (16) 同右、四九頁。
- (17) 前掲『明治天皇紀』第五、五六一頁～五六四頁に関連の記事がある。
- (18) 同右、三〇頁～三二頁。
- (19) 同右、三一頁～三二頁。
- (20) 同右、三二頁～三七頁。
- (21) 同右、四九頁～五二頁。なお、『明治天皇紀』第六（吉川弘文館、一九七一年）、四四頁～四五頁に関連の記事がある。
- (22) 同右、五二頁～五四頁。なお、前掲『明治天皇紀』第六、

九九頁～一〇〇頁に関連の記事がある。

- (23) 同右、五五頁～五六頁。
(24) 同右、五六頁。
(25) 同右、五六頁。
(26) 同右、五八頁～五九頁。
(27) 同右、五九頁。
(28) また、明治天皇の肖像や写真の問題については、多木浩二『天皇の肖像』（岩波書店、一九八八年）などを参照。
(29) 明治二年のキヨソネによる明治天皇の肖像作製については、『明治天皇紀』巻七（吉川弘文館、一九七二年）、七頁～八頁を参照。なお、キヨソネと日本との関係及び日本での業績については、明治美術会・（財）印刷局朝陽会編『キヨッソーネ研究』（中央公論美術出版、一九九九年）、沢護「エドアルド・キヨソネ伝」（『三彩』三五〇号）、山口康助「講演録」明治天皇の御真影を描いたE・キヨソネの生涯」（『明治聖徳記念学会紀要』第二三号）などに詳しい。
(30) 前掲『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集成』第二巻、五九頁～六一頁。
(31) 同右、六一頁～六二頁。
(32) 同右、六二頁。
(33) 同右、六三頁。
(34) 同右。
(35) 同右。
(36) 同右、六四頁。
(37) 同右、六四頁～六五頁。
(38) 日本でのモールの活動については、リチャード・ジップ

- ル「外国人のみた明治日本の近代化と欧化」（『南山大学ヨーロッパ研究センター報』第八号）、O・v・モール／金森誠也『ドイツ貴族の明治宮廷記』（新人物往来社、一九八八年）などを参照。
(39) 前掲『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集成』第二巻、六五頁～六六頁。
(40) 同右、六七頁～六八頁。
(41) 同右、六八頁。
(42) このことについては前掲『明治天皇紀』巻六、七九九頁を参照。
(43) 同右、六九頁。
(44) 同右、六九頁～七一頁。
(45) このことについては前掲『明治天皇紀』巻七、五一四頁～五一二頁を参照。
(46) 前掲『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集成』第二巻、七二頁～八一頁。
(47) このことについては拙稿「皇太子裕仁親王の教育問題と金子堅太郎」（『大倉山論集』第五〇輯所収）を参照。
(48) 皇太子ニコライの来日と大津事件については、外務省編纂『日本外交文書』第二四巻（一九五二年）の「露国皇太子大津ニ於テ遭難一件」をはじめ、保田孝一「最後のロシア皇帝ニコライ二世の日記」（『講談社学術文庫』（講談社、二〇〇九年）、一九頁～三〇頁、六二頁～八一頁などを参照。また参考史料・文献については、尾佐竹猛著・三谷太一郎校注『大津事件―ロシア皇太子大津遭難―』（岩波文庫）（岩波書店、一九九一年）の「主要資料文献」に掲げられた「関係者記録」「研究文献」「関係者

- 伝記」中のものを参照。
- (49) 前掲『明治天皇紀』巻七、八一〇頁～八五七頁にかなりの字数を割いて記事を書いている。
- (50) 前掲『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集成』第二巻、八一頁。
- (51) このことを長崎が調べてみたが、その根拠を見出すことはできなかつたと語っている(前掲『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集成』第二巻、八一頁)。
- (52) 前掲『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集成』第二巻、八五頁。
- (53) 同右。
- (54) 忠義公らによる饗応については、前掲『明治天皇紀』巻七、八〇六頁～八〇七頁、前掲『大津事件―ロシア皇太子大津遭難―』、四〇頁～四二頁を参照。他方、露国皇太子がこの饗応をどのように捉えていたかは前掲『最後のロシア皇帝ニコライ二世の日記』、四九頁～五五頁を参照。
- (55) 前掲『臨時帝室編修局史料「明治天皇紀」談話記録集成』第二巻、九四頁。
- (56) 同右、九五頁～九六頁。
- (57) 同右、九六頁～九七頁。
- (58) 同右、九七頁～九九頁。
- (59) 同右、一〇〇頁～一〇一頁。
- (60) 同右、一〇一頁。
- (61) 同右、一〇二頁。

(大正大学文学部教授)